

僕の宝物は何だろう。

まず始めに思い浮かんだのは三歳の頃、父に買ってもらった飛行機の玩具である。当時の記憶はあまり残っていないが、嬉しかったことを鮮明に覚えている。翼が折れてしまっているが大切に残している。

その次に思い浮かんだのは、蔵の奥にある墨壺だ。それはまるで、僕を待つように輝かせながら静かに置いてあった。蔵に興味を持ち始めた頃から入る度、必ず手に取った。自分の一番の宝物だと思った時期もあった。そして、成長するにつれ、もしかすると先祖が生涯愛情を込めて使い、宝物にしていたかもしれないと考えるようになった。

最近宝物と思っているのは、古川の自然だ。悲しい時、嬉しい時、僕は空を見上げる。空は僕を励ましてくれたら、喜びを与えてくれたりする。堤防に並ぶ桜、花びらが優雅に舞う姿、緑が生い茂り夏の日差しに煌めく姿。雪化粧。自然は常に変化し、自然ならではの姿を見せる。そのなかで自然と闘い必死に生きる生き物の姿も本当に輝いてみえる。

視覚と聴覚などが不自由だったヘレン・ケラーはこんな名言を残している。「世界で最も美しいもののほとんどは、目で見たり、手で触れたりすることはできません。心で感じなければいけないのです。」と。僕は一瞬息が止まったかと思った。目に見えない、触れることもできない、でも温かい、日々の生活のなかで出会った人の優しさも大きな宝物ではないか。一期一会の言葉のように、人との出会いから喜びを感じ、感謝し、それがいつしか自分の宝物になってゆく。

僕は今自分が宝物と思っているものをこれから先、歳を重ねても大切にしていきたいと思う。そして、何気なく生活するなかで新たな発見をしたり、自分がつくりあげたりして、一つ一つ宝物を増やしていきたいと思う。そう思うと周りのものが一層輝いて見えた。

僕の宝物は…何だろう。